The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	森鷗外訳「戰僧」について ： 翻訳底本との対比に見る鷗外訳の特質
Author(s)	中, 直一
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 10-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91552
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

森鷗外訳「戰僧」について
―翻訳底本との対比に見る鷗外訳の特質―

中　直一

１　はじめに

森鷗外訳の「戰僧」は、アルフォンス・ドーデの「反徒の首領」(*Le Cabecilla*)[1]を、独訳版 *Der Feldprediger* から重訳したものである。鷗外訳は、はじめ 1889（明治 22）年、雑誌『少年園』第 10 号に発表され、その後 1891（明治 24）年、『柵草紙』第 21 号に再掲され（ただし一部異同がある）、さらに 1892（明治 25）年に『水沫集』に収められた。岩波版『鷗外全集』に収載されている「戰僧」は、『改訂水沫集』を底本としている。

筆者は以前、雑誌『少年園』がどのような読者層を念頭に置いて編集されていたものであるかを調査し、あわせて同誌に掲載された鷗外訳「新世界の浦島」[2]および「戰僧」について、『少年園』掲載版と岩波版『鷗外全集』の表記の異同（おもにルビの使用法）を調査したことがある[3]。ただし当該拙論においては、鷗外の訳文と翻訳底本の調査は中心的課題ではなかったため、鷗外訳「戰僧」については、翻訳底本と乖離がある旨を指摘するのみにとどまっていた。

本論文では、上掲拙論において分析することが出来なかった、翻訳底本と鷗外訳の異同を明らかにしつつ、鷗外訳の特質を解明したい。その際、鷗外訳の翻訳底本として、東京大学総合図書館の鷗外文庫所蔵本 Daudet, Alphonse, *Der Feldprediger*. In: A. Daudet, *Aus dem Leben*. Deutsch von Dr. Adolf Gerstmann. 2. Aufl. Dresden & Leipzig, Verlag von Heinrich Minden. 1886 の複写を使用し、本論文中では略号として〔底本〕というカッコ付きの語を使用する。翻訳底本のドイツ語文については、参考までに筆者による訳文・訳語を示したが、その際〔私訳〕というカッコ付きの語でそれを示した。鷗外訳は『鷗外全集』第 1 巻（岩波書店、1971 年）所収の「戰僧」を使用テキストとし、〔鷗外訳・全集版〕というカッコ付きの語を使用する。

本論文においては、底本ドイツ語と『鷗外全集』収載の「戰僧」を対比するが、必要に応じて、『少年園』、『柵草紙』、『水沫集』も参照した。『少年園』を参照する際には、『復刻版少年園』（不二出版、1988 年）を使用し、略号として〔鷗外訳・少年園版〕を使用する。『柵草紙』を参照する際には、大阪大学所蔵雑誌の複写を使用し、略号として〔鷗外訳・柵草紙版〕を使用する。『水沫集』を参照する際には、国立国会図書館デジタルコレクションからダウンロードした PDF 版を使用し、略号として〔鷗外訳・水沫集版〕を使用する。

ドイツ語底本および鷗外訳の引用については、それぞれ引用文の後に掲載ページをカッコに入れて示す。引用文中の点線アンダーラインは、筆者が便宜的に付したもので、鷗外の訳文と翻訳底本に相違が見られる部分を示している。鷗外の訳文を引用する際には、筆者の PC 環境の許す限り旧漢字・旧仮名を使用した。

上記のように鷗外はドーデのフランス語原文を直接読んで「戰僧」を翻訳したのではなく、その独訳版から日本語に重訳した。本論文の関心事は、ドーデの原作を鷗外がどう味読したかを知ることにあるのではなく、あくまでも「鷗外訳の特質」を知ることにある。従って、鷗外の翻訳底本である上記独訳版と鷗外訳「戰僧」を対比して論を進め、フランス語原文との対比は本論文の課題としない次第である。

---

[1] ドーデの原作については、富田仁「鷗外とドーデ――『戰僧』、『盲帝の曲』をめぐって――」（長谷川泉編『比較文学研究　森鷗外』〔朝日出版社、1978 年〕所収）p. 125 を参照。同書によれば、「反徒の首領」は『研究と風景画』(*Études et paysages*)に収められ、原題の *Le Cabecilla* はスペイン語の由である。ただし本文はフランス語で書かれている。

[2] 『水沫集』に収められた際に「新浦島」と改題された。

[3] 拙論「雑誌『少年園』と森鷗外の翻訳」（大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 2019　言語文化の比較と交流』第 6 号〔2020 年〕所収）。

２　「戰僧」の訳文の特質――その概観

戰僧」は極めて短い小説で、岩波版『鷗外全集』で 5 ページを占める程度である。小説の舞台はスペインで、王党派と共和派が戦闘を繰り広げる中、王党派の捕虜となった共和派の兵士たちが、王党派の従軍僧（戰僧）の説得（というより脅迫）によって王党派に寝返るが、兵士たちの中で、ただ一人少年の兵士のみが説得に応じず、寝返ることよりむしろ殺される道を選ぶ、という話である。

この短い小説を、鷗外はどう訳したか。あらかじめ結論を述べるならば、今日の「翻訳」の在り方からはかなり外れ、底本原文にない文言を訳文の中に創作的に付加したり、逆に底本にある文言の訳出を省略し、あるいは要約的に訳す等々と、かなり自在な訳になっている。以下本論文では、その翻訳ぶりを分析するのだが、まず本節では、鷗外の翻訳ぶりが複雑にあらわれた――すなわち、創作的付加や省略、要約的翻訳が一文にあらわれた――例を検討する。

〔底本〕In tiefem Schweigen hatten sich die Soldaten des Prätendenten Carlos rings im Kreise gruppirt, die Flinte hing hinten am Bandelier um die Schulter und das eine Knie ruhte auf dem am Boden liegenden weißen Barett. (S.89f.)

〔私訳〕全く無言のまま、簒奪者カルロスの兵士たちは、輪になって集まっていた。銃を肩のたすきの後ろに掛け、床に敷かれた白い帽子の上に片膝をついていた。

〔鷗外訳・全集版〕机の周圍には革の襷にて銃を背に負ひたる許多の士卒、前に白き戎帽を置きてその上に右の片膝付き、祈誓に餘念なく見ゆ（p.159）

この一文に、初期鷗外の翻訳ぶりが典型的に示されている。省略、創作的付加、要約的翻訳の三つが全て見られるのである。

まず省略であるが、底本の In tiefem Schweigen（「全く無言のまま」の意味で直訳すると「深い沈黙の中で」）の部分が訳されていない。

他方、鷗外訳の「祈誓に餘念なく見ゆ」は、底本にない描写で、鷗外が創作的に付加したものである。底本では、兵士たち（「簒奪者カルロスの兵士たち」とは王党派の兵士を指す）が片膝をついていたことのみが書かれている。欧米の読者であれば、この描写のみで祈祷の場面であることが分かるが、そのようなキリスト教的な文化環境にない日本の読者に向けて、鷗外は説明的な文章を訳文の中に加えたものと思われる。これは創作的付加であり、かつ注釈的な意味合いも持つ。

第三に指摘すべきは、底本原文の構文のままに訳さずに、適宜新たな構成の日本文を創出するという、要約的な訳しぶりが見られることである。上記底本のドイツ語文の構文を見ると、三つの部分から成り立っている。すなわち、「主語＋動詞」の組み合わせによる文章三つで構成された一文になっている。具体的に言えば、(1) die Soldaten hatten sich gruppirt（兵士たちは集まっていた）、(2) die Flinte hing（銃を……掛けていた――直訳すれば、「銃が……かかっていた」）、そして(3) das eine Knie ruhte（片膝を……ついていた――直訳すれば、「片膝は……置かれていた」）[4]の三つである。ところが鷗外は原文の第二文を、まるで関係文であるかのように、「兵士」を修飾する文章として訳している。つまり、「原文の主語を訳文でも主語として訳す、原文の動詞を訳文でも動詞として訳す」という翻訳方法とは異なる翻訳姿勢を見せているのである。

上記の例は、「戰僧」における鷗外の翻訳流儀が、数行の内に凝縮してあらわれた典型例であるが、以下本論文では、創作的付加（および注釈的付加）や省略、要約的翻訳がどのようにあらわれているのか、具体例を数例ずつ集めて分析を行う。

３　創作的付加と注釈的付加

先に述べたように、鷗外の訳文の中には、底本原文にない文言が付加される場合があった。

[4] „das eine Knie“（片膝）を、鷗外は「右の片膝」を訳している。これは注釈的付加であろう。

それには幾つかのパターンがある。まず指摘すべきは、訳注に相当する解説を訳文の中に織り込むケースである。次の例では、西洋の文物についての訳注的文言が、訳文本文の中に組み入れられている。

〔底本〕Zwei halb zerbrochene Alcarazas (S.89)

〔私訳〕半ば壊れたアルカラサ二つ

〔鷗外訳・全集版〕彼の西斑牙にて、「アルカラサ」と稱へたる陶瓶の半ば壊れたるにぞありける（p.159）

私訳で示したように、底本にはアルカラサなるものが登場する。しかし、これが一体どのような物であるのか、現代読者でもにわかには分からない。鷗外は、アルカラサを知らぬであろう明治の読者のために、注釈的説明を、訳文本文の中に織り込んだものと理解出来る。

物品についての注釈的付加の他に、鷗外は物語の状況を読者が容易に理解し得るような説明も、訳文の中にさりげなく付加している。

〔底本〕die Gefangenen (S.89)

〔私訳〕俘虜

〔鷗外訳・全集版〕新に獲たる俘虜（p.159）

ドイツ語文では、単に俘虜としか示されていないが、鷗外は王党派の陣地へと引き連れられて来た共和派の兵士について「新に獲たる」と、修飾語句を創作的に付加し、状況を邦訳読者に対し、より明確に把握させようとしている。

上記の例とは少し異なり、鷗外が注釈者としてではなく、むしろ創作者として訳文の中に底本にない語句を盛り込んだ例も見られる。

〔底本〕Die armen Teufel!　(S.94)

〔私訳〕哀れな連中よ！

〔鷗外訳・全集版〕果なきは人の心なり、五尺の肉身に制馭せられて、誓を忘れ義に背くは何事ぞ。（p.161）

場面は、王党派の捕虜となった共和派の兵士たちが、戦僧からの威圧的説得に応じて、共和派から王党派に寝返り、「国王万歳」と叫んだ、その後のシーンである。ここで作者ドーデは、寝返った兵士たちのことを「哀れな連中よ」と、自作の中に作者自らの所感を書き込んでいる。これは、この物語の一つの伏線になっていて、多くの兵士が帰順する中で、一人の少年兵士だけが帰順を潔しとせず、最後に非業の死を遂げる、という結末との対照を示している。すなわち、寝返りを良しとしない少年兵士の矜持と、死を恐れるあまり敵軍に寝返る多くの兵士たちを対比させる役割を、作者はこの「哀れな連中よ！」という一句に込めたものであると思われる。訳者鷗外も、物語のこのような対照性を十分に認識し、かつ原作者以上に、寝返った兵士たちに対する批判的所感を強調している。鷗外の「果なきは人の心なり、五尺の肉身に制馭せられて、誓を忘れ義に背くは何事ぞ」という訳文は、底本の意訳というレヴェルを越えて、もはや創作的付加と言い得る文章になっていると判断し得る。

鷗外訳にはさらに、全く翻訳底本から離れて、鷗外自身の所感を訳文の中に書き込み、後にそれを削除したケースが見られる。そのことは、初出である『少年園』版と、その後の再録版である『柵草紙』版、および全集版を対比してみればわかる。（以下の引用における点線アンダーライン以外のアンダーラインおよび二重アンダーラインは、元から付されているものである。）

〔底本〕... gewahrte man die Uniform, unter dem zerknitterten Chorhemd erblickte man den Kolben einer Pistole und den Griff eines katalonischen Messers. (S.91)

〔私訳〕軍服が見えたが、皺だらけの合唱着の下には、ピストルの床尾とカタロニア刀の柄が見えた。

〔鷗外訳・少年園版〕……着古(きふる)びて皺多き僧衣の下より、軍服のほの見ゆる――否、佩(お)びたるカタロンニヤ刀の柄(つか)と短銃の把(え)[5]との、其間(ひま)より露はるゝは、山陽外史が襟呿甲覩

[5] 「把」に振られたルビは「は」とも、「え」の変体仮名とも読める。一応「え」と読んでおく。右図参照。

といひし様にも似たらんかし。（『少年園』第 10 号 p.14）

〔鷗外訳・柵草紙版〕……着古びて皺多き僧衣の下よりは、軍服ほの見え、佩びたるカタロンニヤ刀の柄と短銃の把と其間より露れたり。（『柵草紙』第 21 号 p.26）

〔鷗外訳・全集版〕……着古びて皺多き僧衣の下よりは、軍服ほの見え、佩びたるカタルニヤ刀の柄と短銃の把と其間より露れたり。（p.160）

戦僧が衣の下に刀と短銃を忍ばせているという描写の部分であるが、『少年園』と後の版との異同については、全集版の「後記」にも、異同の存在する旨が記されている。西洋の文学作品の翻訳の中に頼山陽の『日本外史』への言及があるのは、一見して創作的付加であることが分かる。推測にすぎないが、鷗外は『少年園』に「戰僧」を掲載するにあたり、少年読者への、一種の教育的見地から、外国文学を味読する際にも日本の思想家に類比の言葉があることを常に想起するようにとの思いがあったのかも知れない。とはいえ、『少年園』から『柵草紙』に再録するに際しては、こうした教育者的見地からの創作的付加を訳文の中に織り込むよりは、むしろ西洋文学作品の中に頼山陽という名前が登場するという異質性を除去する方が好ましいと判断したものと考えられる。

なお頼山陽の「襟呿甲覩」という言葉については、現時点で調査が行き届いていない。辞書を単純に引く限り、「襟」は「えり」、「呿」は「ひらく」、「甲」は「かぶと」ないし「よろい」、そして「覩」は「みる」となり、全体として「襟を開けば鎧が見える」、ということになる。所謂「衣の下の鎧」に近い表現なのかも知れない。ただし、頼山陽がどのような文脈においてどのような意味で使用したのかは、上述のように調査が行き届かず、この点については読者諸賢のご教示を乞う次第である[6]。

以上、本節で見てきたように、鷗外には底本にない創作的な付加が存在したが、同じく創作的ではあるものの、「付加」でなく、「訳語の創作的変更」とも称すべき例も見られる。

〔底本〕So trat der Priester denn einen Schritt zurück, erhob das Gewehr, legte auf sein Beichtkind an und schoß es nieder, daß es lautlos zu Boden sank. (S.98)

〔私訳〕そこで僧は一歩後ろに下がり、銃を取り出して告解者にあてがい、発射したので、告解者は声もなく地に倒れた。

〔鷗外訳・全集版〕戰僧は一足下るよと見えしが、銃聲一轟、此少年の義士は烟の下に僵れたり。（p.163）

小説の最後の部分、戦僧が少年兵士を短銃で撃つ場面である。ここで鷗外は、死を前にして罪を告白する者（告解者）を意味する Beichtkind という語を「少年の義士」と訳している。キリスト教の文脈に通じぬ日本人読者を念頭に、鷗外が「告解者」ないしそれに類する訳語の使用を避けた、ということは理解し得るが、それに代わる訳語として、「少年の義士」を充てるのは、意訳の次元を超えて、創作的営為に近いと評し得るのではないか。鷗外は、物語の最後の部分において、自己の信念を貫くために死を選択した少年を「義士」の一語で顕彰しようとしたものと解される。これが、翻訳家としての営みなのか、一個の作家としての営みなのかは、評価の分かれる所であろう。

４　省略

翻訳底本に存在する文言を鷗外が訳出しなかったケースについては、省略の理由が説明し得る場合もあれば、説明が困難な場合もある。また、省略によって、登場人物の造形が、底本から微妙に乖離した場合も存在する。

最初に検討するのは、数行の中に、省略が複数存在し、かつ省略の説明がつくものとつかないものが混在しているケースである。

〔底本〕So wahr, als heute das heilige Osterfest ist, verspreche ich euch, daß ich denjenigen, welche jetzt rufen: „Es lebe der König!“ das Leben schenke und daß ich sie unter unsere

[6] 前掲『鷗外全集』第1巻「後記」(p.646)には、初出『少年園』版に後の版とは異なる記載がある旨が記されている。しかし残念ながら「襟呿甲覩」の意味や出典についての言及はない。

Truppen aufnehmen will, sie sollten es so gut haben, wie unsere anderen Soldaten. (S.93f.)

〔私訳〕今日が聖なる復活祭であるのと同じくらいはっきりと、私は諸君に約束しよう。今「国王万歳」と唱える者には命を保証し、わが軍に採用しよう。そうすれば、諸君はわが軍の他の兵士と同じくらいに命を保持するはずだ。

〔鷗外訳・全集版〕爾等もその鎧を投げ棄て、我白き帽子を戴きて、『國王萬歳』と唱へよ。我神聖なる軍に加へて得させんに。（p.161）

戦僧が捕虜たちに寝返りを強いる場面であるが、鷗外は底本（および私訳）の点線で示した部の、都合三ヵ所を訳出していない。

第一の「今日が聖なる復活祭であるのと同じくらいはっきりと」の部分を鷗外が省略したことについては、その理由が説明し得る。すなわち、キリスト教の祭日になじみの薄い日本人読者に対して、祭日云々の記述を敢えて訳文の中に盛り込まなくとも、物語全体の流れを阻害することはない、という鷗外の判断があったものと推測し得る。

しかし、第二の「命を保証し」、および第三の「諸君はわが軍の他の兵士と同じくらいに命を保持するはずだ」の部分を訳出しなかったことについては、説明が困難である。王党派に帰順するなら、捕虜の命を保証し、かつ元からの王党派兵士と同等の扱いを受けることになるという戦僧の言葉は、捕虜への説得の材料として物語の重要な要素となるからであり、実際に物語では、少年兵士以外の全ての捕虜が王党派に帰順することになっている。こうした、むしろ重要な要素を、鷗外が何故訳出しなかったのかについては、筆者には合理的な説明を見出すことが出来ない。初出『少年園』の掲載スペースの関係で、ある程度訳文の分量を抑える必要があったのか。否、そもそも鷗外が訳出を省略する際に、全て何らかの計算の上でこれを行った、と考えること自体が妥当なのか、という疑問も生じ得るのである。

鷗外が一文を全く訳出しなかった例も見られる。物語の最初の方で、戦僧の人となりを描く部分の一部が、鷗外訳では欠落している。

〔底本〕Wie sein Doppelwesen als Priester und Krieger doch auch schon in seinen Gesichtszügen zum Ausdruck kam! (S.90)

〔私訳〕僧であり且つ戦士であるという二重の存在が、どれほど彼の表情の中にあらわれていたことであろうか！

鷗外がこの部分を訳出しなかった理由ははっきりしない。物語の中心的人物である戦僧が、単なる僧侶でなく、時として敵軍の兵士の殺戮にも加担する存在であること――そしてこのことは、この短編の結末に大きく関わる――を示す、かなり重要な一文である。それを鷗外が敢えて省略した理由は、不明としか言いようがない。強いて言えば、敵軍兵士に対する戦僧の冷酷さを、底本ほどに強調しなくてもよいと訳者鷗外が判断した――ということも、一応は考え得る。

しかし、次に見る省略箇所を検討すれば、むしろ鷗外の訳文が、逆の方向への傾向を見せていることに気づく。すなわち、底本原文の別の箇所では、冷酷無比な戦僧の中に、それとは異なる人間的な一面があることが描かれているが、その部分を鷗外は、部分的にしか訳出しない、あるいは全く訳出しない、という方策を取っているのである。

たとえば、次に示すのは、共和派の捕虜が王党派の陣営に送り込まれてくる少し前の戦僧を描いた部分である。

〔底本〕Wunderbarer Weise war der Priester aber an diesem Morgen in milder und versöhnlicher Stimmung. Die Feier des Hochamts, der Erfolg, den die Seinigen am Tage vorher errungen, vielleicht auch die Weihe des Ostertages hatten ihren Einfluß auf den merkwürdigen Gottesmann ausgeübt und in seinem Gesicht war ein sonst nicht vorhandener Zug von Güte und Freundlichkeit lesbar. (S.91f.)

〔私訳〕奇妙なことに、この日の朝、僧は穏やかで優しい気持ちになっていた。荘厳ミサの祭典や、昨日の自軍の勝利、そしてまた、ひょっとしたら復活祭の聖別式が、この奇妙なる神職の人物に影響を与えたのかも知れない。そしてこの人物の面差しには、普段は見られない善良さと親切心の表情があらわれていたのである。

〔鷗外訳・全集版〕祭を終はりし僧の面は、今日の祭の心に協ひてや、又た昨日の勝を思ひ出でゝや、何時になく優しく見えたり（p.160）

鷗外訳でも確かに、当日の戦僧が普段より優しい気分にあったことは描かれている。しかし、底本原文で最初と最後の二ヵ所においてそのことが描かれているのに対し、鷗外はその前半部分を訳出していない。

同様の、そしてこれ以上に、戦僧の二面性（すなわち、冷酷無比な面と、宥和赦免の要素）を、むしろ一面的なものに還元してしまうような訳文が、物語の最終場面で見られる。死を決意して志を枉げぬ少年に対する、戦僧の心理を描いた部分である。

〔底本〕Angesichts dieser Todesverachtung, dieses Heldenmuthes konnte der Priester eine Regung des Mitgefühls doch nicht unterdrücken. ／„Hast Du noch irgend etwas zu sagen? Willst Du essen? Willst Du trinken?“ (S.96f.)

〔私訳〕死を恐れぬ、この英雄的な気概を目の当たりにして、僧は同情の念を抑えることが出来なかった。／「何か言うことはあるか？　何か食べたいか？　何か飲みたいか？」

〔鷗外訳・全集版〕「生前に望はなきか。」（p.162）

上記引用文の中のスラッシュ記号（／）は、引用文原文で段落が変わっていることを示す。共和派の兵士の中で、一人だけ寝返ることを拒否し、むしろ死を選ぶと述べた十七歳の少年兵士に対し、戦僧は周囲の兵士の一人に命じて、銃口を少年に向けさせる。しかし少年は、眉一つ動かさないで従容として死を迎えようとする。底本では、その場面のすぐ後に、上記の文章が続く。少年兵士の英雄的な気概に対し、敵である筈の戦僧でさえ、同情の念を禁じえなかったという描写であり、戦僧が単に冷酷な人間であるということではなく、一人の生身の人間として、敵軍への帰順よりもむしろ死を選ぶ少年兵士への、一種の共感を示し得る人物としての面も描かれている。

鷗外訳ではこの部分が全く訳出されていない。従って、鷗外の訳文を読む日本の読者は、少年兵士の英雄的な振舞と、これに対して少年の気概を全く感じぬ戦僧の態度を、非常に対比的にとらえることになる。

また段落が変わった後の部分で、底本では、戦僧が少年兵士に対し、具体的に「何か食べたいか？　何か飲みたいか？」と尋ねているが、鷗外はその部分も訳していない。上に引用した箇所の前の部分では、共和派の軍隊で食料が枯渇し、飢餓状態のままに捕虜となった兵士たちたちに寝返りを勧める戦僧の説諭の合間に、堂内ではわざと調理の匂いを漂わせて、この面でも共和派の兵士の心を迷わせるような状況を作り出していた、という描写がある。王党派に帰順した兵士たちには、もちろん直ちに食事が与えられるわけだが、帰順を拒否した少年兵士は、飢餓状態のままに死を選択することになる。底本原文では、戦僧が、せめて死の前に飢えと渇きをいやす機会を与えようと少年兵士に声をかける、という描写がなされているが、鷗外訳では、そこが訳出されていない。結果として、鷗外訳では戦僧の冷酷さを強調する方向の訳文となっている。

底本に描かれている戦僧の二面性を、鷗外が一面化の方向に向かわせたことに関し、強いて理由を考えるなら、少年兵士の英雄的気概を『少年園』の読者に、より強調して伝えるためには、戦僧に人間性の一面の存することを訳文に盛り込まぬ方が、少年の「義士」としての面をより強く印象付けることになる、との鷗外の判断があったとも考え得る。

５　要約的翻訳

鷗外の訳文の中には、文章の一部、あるいは全部を省略するといった次元を越えて、省略を含みつつ、さらに底本原文の構造をかなり変形して訳出した場合も多い。以下に検討するのは、物語の最初の方で、捕虜となった共和派の兵士たちが、その冷酷さが敵方にも知れ渡っている戦僧（底本の„er“、私訳の「彼」）の前に引き据えられて、今後の行く末を案じる場面である。

〔底本〕„Was hat er mit uns vor?“ fragten sich die erschrockenen Gefangenen, und indem sie das Ende der Messe abwarteten, gingen ihnen alle die Geschichten von der unbändigen Wildheit und Grausamkeit des Feldpredigers durch den Kopf, die sie hatten erzählen hören und die ihn zu einer über die Maßen gefürchteten Persönlichkeit in der karlistischen Armee gemacht hatten. (S.91)

〔私訳〕「彼は我々をどうするつもりだろう」と、怯え切った捕虜たちは自問した。そして祈祷が終わるのを待つ間、戦僧の異常なまでの野蛮さ、残酷さが、捕虜たちの脳裏

をよぎった。その野蛮さ、残酷さは、捕虜たちの耳にも届いていていたものであり、戦僧をカルロス王の軍隊の中でもひときわ恐れられた人物にしていたのである。

〔鷗外訳・全集版〕當時世の中に語り傳へたる、戰僧の異教の人に接する苛虐の跡を、彼是と思ひ合せて、牽き据ゑられし俘虜は安き心もなかりしが、……（p.160）

一見して分かるように、鷗外の訳文はわずか二行で、底本のかなりの部分（点線のアンダーラインを引いた部分）を訳出していない。しかも底本の一つの段落を、鷗外は一文に要約的に翻訳している。

それに加え、引用した鷗外の訳文が「なかりしが、……」で終わっていることから分かるように、鷗外訳では上記の訳文の後に、さらに底本の次の段落の最初の文章を繋げて訳出している。つまり、鷗外は底本のドイツ語のかなりの部分を省略しつつ、自分が訳出した部分も、原文の次の段落に接合せしめるという、かなり自在な訳文を作ったわけである。

次の例は、話の本筋にあまり関係のない部分を抄訳した例である。

〔底本〕Sobald der Gottesdienst beendet, und während der Sakristan noch mit dem Abräumen des Altars beschäftigt war ― er schloß die geweihten Geräthe in eine Kiste, die beim Marsche einem Maulthier aufgeladen wurde ― (S.92)

〔私訳〕礼拝が終わるとすぐに、そして聖具室係の男がまだ祭壇の片付けをしている最中に ―― 係の男は神器類を、行軍の間騾馬の背に乗せられていた箱の中に仕舞っていた ――

〔鷗外訳・全集版〕徒弟は驢馬に着くる様に拵へたる箱に祭の品々を収むる中に、(p.160)

ここでも私訳で三行にわたる内容が、鷗外訳では一行分に切り詰められている。引用した底本ドイツ語は、文法用語でいう副文にあたり、実はこの後に主文が続く。本論文では引用していないが、主文の主語は戦僧である。逆に言うと、副文で描写されている聖具室係の男の仕事ぶりは、この物語の中心人物とは直接関係がない。鷗外は、そのような言わば周辺的な描写の部分を切り詰めて訳し、そのことにより読者の視線を戦僧の振舞に焦点化せしめようとしたものと考えられる。

６　翻訳技法と誤植

前節までに述べたように「戰僧」には、大きく分けて「創作的付加」「省略」「要約的翻訳」の三つの特質が見られた。本節以降第８節まで、その他のこまごまとした点について、さらに検討を進めたい。

本節では、鷗外のその他の翻訳技法を一つ、及び一見誤訳と思われる箇所について論じる。まず検討するのは、ドイツ語の形容詞を訳文において補語（述語）のように翻訳することによって、過去形の羅列を避ける翻訳技法である。

〔底本〕Er bot einen eigenthümlichen Anblick, dieser Militärpriester, der inmitten der Krigerschaaren seinen Dienst verrichtete. (S.90)

〔私訳〕彼、すなわち戦士たちの中央で勤行をなしていた戦僧は、独特の様子を見せていた。

〔鷗外訳・全集版〕此隊伍の中央にありて神に事ふる戰僧の形は世の常ならず。（p.159）

鷗外訳と私訳の違いを単純化して述べれば、底本で「戦僧は、独特の様子を見せていた」となっている部分を、鷗外は（現代風に書き直すと）「戦僧の様子は独特である」と訳した、ということになる。すなわち、形容詞 eigenthümlich（独特の）が名詞 Anblick（様子）を修飾するという底本の構造を棄て、鷗外は敢えて名詞 Anblick を主語のように、そして形容詞 eigenthümlich を補語（述語）のように訳している。私訳ではそこを、底本の構造のままに訳したが、私訳のような訳し方では、文末が過去形になる。物語文では、過去形が続くのは当然のことであるが、日本語の場合、「～した、そして～した。そして～した」等々と過去形が続くのは、文章が単調になる嫌いがある。そこで鷗外はドイツ語文の構造を敢えて

棄てたのであろう[7]。

もう一つ指摘すべきは誤訳である。「誤訳」と表現したが、以下に見るように、およそ誤訳しようのない語彙の誤訳であり、何らかの単純ミスの可能性がある。

〔底本〕… rief der Priester die Gefangenen zu sich heran.　Es waren etwa zwölf　Soldaten der republikanischen Armee.　(S.92)

〔私訳〕僧は捕虜たちを自分の所に呼び寄せた。それは共和国軍のおよそ十二人の兵士であった。

〔鷗外訳・全集版〕……戰僧は共和軍の俘虜十三人を、身邊近く喚び寄せたり。（p.160）

「およそ十二人」と訳すべき所を、鷗外は「十三人」と訳している。数詞を間違えるという、およそ信じ難い不可思議な間違いである。はたして、鷗外がミスを犯したのか。

初出『少年園』版を見れば、疑問は氷解する。そこでは正しく「十二人」と訳されているのである。以下に、『少年園』版、再掲である『柵草紙』版、そして再々掲である『水沫集』版の当該部分を引用する。

〔鷗外訳・少年園版〕……戰僧は共和軍の俘虜十二人を、身邊（ほとり）近く喚（よ）び寄せたり。（『少年園』第 10 号 p.15）

〔鷗外訳・柵草紙版〕……戰僧は共和軍の俘虜十二人を、身邊近く喚び寄せたり。（『柵草紙』第 21 号 p.26）

〔鷗外訳・水沫集版〕……戰僧は共和軍の俘虜十三人を、身邊近く喚び寄せたり。（『水沫集』p.22）

『少年園』版が『柵草紙』に再掲される際には正しく「十二人」と記されていたのに、『水沫集』に採録された時に、ミスが生じた。おそらくは誤植であり、それを『水沫集』の編集者が見落としたのであろう。

捕虜の数が十二人であるか十三人であるかは、この物語において大きな意味を持つわけではない。底本の「およそ十二人」という表現の中に含まれる「およそ」(etwa)という語彙からも分かるように、底本でも概数で捕虜の人数が示されていて、一ダースの区切りのよい十二が使用されていたものであることからも、それがうかがえる。『水沫集』の編集者が誤植に気づかず、それが最終的に岩波版『鷗外全集』にまで引き継がれたことになる。

7　鷗外による書き込みについて

鷗外文庫所蔵の「戰僧」翻訳底本には、鷗外によるドイツ語の書き込みが二カ所ある。いずれも、底本のドイツ語、あるいはラテン語の意味を、別のドイツ語で記したものである。

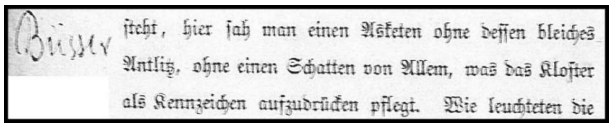
〔底本〕　… hier sah man einen Asketen ohne dessen bleiches Antlitz, ohne einen Schatten von Allem, was das Kloster als Kennzeichen aufzudrücken pflegt. (S.90)

〔私訳〕……ここでは苦行僧が、青白い顔もせず、また修道院らしいあらゆる影も見せていなかった。

〔鷗外訳・全集版〕……此懺悔の面上には、彼重垣に圍まれたる寺院の人の容貌に捺す印とては影だに見えず。（p.159）

戦僧が、戦闘に参加する軍人でもあるため、顔は陽に焼け、修道院で苦行をつむ僧とは思えぬ姿を見せていた、という描写の部分である。この箇所の鷗外文庫所蔵本欄外に Büsser との書込がある。（図版 1 を参照）

[7] 過去形の羅列を訳文で避けるべく、底本原文の構文を敢えて変形して訳す技法は、鷗外の他の翻訳作品にも見られる技法である。拙論「鴎外訳「新浦島」に見られる翻訳技法（2）― 過去形の羅列を避ける技法 ―」（大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 2014 言語文化の比較と交流 2』〔2015 年〕所収）を参照。


Büsser steht, hier sah man einen Asketen ohne dessen bleiches Antlitz, ohne einen Schatten von Allem, was das Kloster als Kennzeichen aufzudrücken pflegt. Wie leuchteten die

【図版１】

Büsser は現代の綴りでは Büßer であり「悔悛者」の意味となる。鷗外訳では「懺悔」にあたる。おそらく翻訳底本の Asket（「苦行僧」の意の外来語系ドイツ語）の意味を別のドイツ語で記したものであろう。鷗外の「懺悔」という訳語であるが、初出『少年園』版「戰僧」では「懺群者」となっている（『少年園』第 10 号 p.14）。

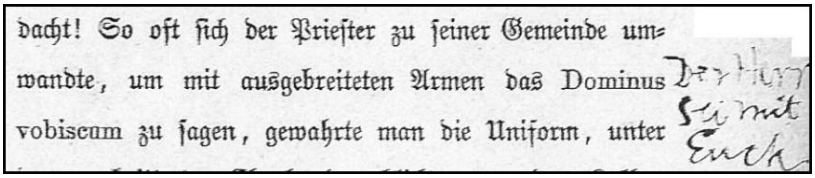
もう一つの書き込みは、ミサで使用されるラテン語の意味をドイツ語で記したものである。

〔底本〕 So oft sich der Priester zu seiner Gemeinde umwandte, um mit ausgebreiteten Armen das Dominus vobiscum zu sagen, ... (S.91)

〔私訳〕僧が両腕を広げて「主なんじらとともにあれ」と述べるために、信者のほうに向きを変えるたびに、

〔鷗外訳・全集版〕僧が聽衆に向ひて兩手を差し伸べて、「神は爾等と倶にあれ」と唱ふる毎に、（p.160）

当該箇所欄外に、Der Herr sei mit Euch との書込がある。（図版２を参照）


dacht! So oft sich der Priester zu seiner Gemeinde umwandte, um mit ausgebreiteten Armen das Dominus vobiscum zu sagen, gewahrte man die Uniform, unter

【図版２】

これは「主が汝とともにあらんことを」の意であり、翻訳底本のラテン語 Dominus vobiscum の意味をドイツ語で記したものである。『独和大辞典』（小学館、1990 年）によれば、Dominus vobiscum は「主なんじらとともにあれ」の意で、ミサ等で司祭が信者に対してなす挨拶の言葉である由。

鷗外文庫所蔵の他の独語書籍では、鷗外の読後感が漢文で書き込まれたり、読了した日付が記されたり、あるいは翻訳を雑誌に分割掲載する際の区切りが数字や記号で示される等々の書き込み事例が見られるが、「戰僧」では上記二か所以外には書き込みが見られない。

８　『少年園』掲載版のルビについて

本節では、初出『少年園』版「戰僧」に付されたルビについて検討する。初出『少年園』版ではルビが多用されているのに対し、その後の版では、ルビは使用されていない。初出でどの程度ルビが使用されていたのか、一例として「戰僧」冒頭部分の訳文を下に掲げる。

〔鷗外訳・少年園版〕誦經聲歇(じゅきやうこえや)みしとき、新に獲たる俘虜(とりこ)を戰僧(せんそう)の前へ牽(ひ)き据(す)へたり。（『少年園』第 10 号 p.13）

〔鷗外訳・全集版〕誦經聲歇みしとき、新に獲たる俘虜を戰僧の前に牽き据ゑたり。（p.159）

この例だけを見れば、単に「初出で存在したルビが、再掲版以降では削除された」という、きわめて単純な事実の確認に止まる。だが、以下に示す例では、底本ドイツ語文の解釈に関わる重要な要素が、ルビの付け方に関連していることが分かり、ひいては鷗外の翻訳原稿がどのように雑誌に掲載されるに至ったのかさえ推測させる契機を与えることになる。

それは「戰僧」の後半の部分に見られる一文である。王党派に帰順することを拒否している少年兵士に対して、寝返りを強いる「手段」が自分にはあると、戦僧が半ば脅迫的に銃殺を示唆する場面である。それに対し少年は次のように応え、脅迫に屈しないことを述べる。

〔底本〕„Ich verachte Deine Mittel!“ rief der Knabe mit stolzer Handbewegung. (S.96)

〔私訳〕「私はあなたの手段を恐れない。」少年は誇らかな手振りを見せて叫んだ。
〔鷗外訳・全集版〕「その術は、余が屑とせざる所なり。」（p.162）

底本（および私訳）を見れば分かるように、少年兵士はなおも寝返りを拒否し、むしろ誇り高く死を選ぶ旨を述べている。鷗外訳・全集版では、地の文が訳出されずに、少年兵士の言葉だけが訳されているが、そこが「その術は、余が屑とせざる所なり」となっている。この訳文の「屑」が問題で、もしもそれを「くず」と読むなら、意味が通じない。仮に「くずとせず」という表現があるとして、強いて解釈するならば、少年兵士は「その手段は屑ではない」、すなわち「その手段は悪くはない」と述べたことになり、意味が逆になってしまう。「屑」を「くず」と読ませるなら、むしろ「その術は、余が屑とする所なり」のように、「屑とせざる」ではなく「屑とする」にしなければ、底本ドイツ文の意味を反映したことにはならない。しかし実際には、鷗外の訳文は「屑とせざる」になっている。ということは、「屑」を「くず」とは読まない可能性が残るのではないか。

そこで筆者は、『少年園』版で「屑」にいかなるルビが振られているかを確認することにした。その結果は以下の通りである。

〔鷗外訳・少年園版〕『その術は、余が屑（ものゝくづ）とせざる所なり。』[8]（『少年園』第 10 号 p.16）

意外というべきか、「屑」に「ものゝくづ」というルビが振られている。つまり、意味の通じ難い、あるいは意味の通じないルビが、初出で示されているわけである。初出のルビを見れば明快な解釈が得られるとの筆者の当初の目論見は、見事に瓦解した。だが鷗外は、本当に「屑」を「ものゝくづ」と読ませたかったのか。

ここで改めて「屑」の字義を調べてみると、はたせるかな「いさぎよし」との読みがあった。この読みで正しいなら、銃殺を示唆しつつ寝返りを迫る戦僧に対し、少年兵士が「その術は、余がいさぎよしとせざる所なり」と述べたことになり、全く意味が通じる。

ここからは筆者の推測にすぎないが、おそらくは鷗外が『少年園』編集部に提出した原稿にはルビが振られていなかったのではないか。少年向け雑誌である『少年園』誌の編集者は、自らの雑誌の読者層の受容能力を考えて、ルビのない鷗外の元原稿に対して、雑誌掲載の過程で新たにルビを付加したのではないか。そして、その際に編集者が、「戦僧」の前後関係を顧慮せずに（もちろん翻訳底本のドイツ文を読むことなしに）、単純作業として漢字の一部にルビを付す作業を行い、その際思わぬミスが生じたのかも知れない。

以上は単なる推測にすぎないが、鷗外の訳稿が雑誌等に掲載されるに際し、編集者がどの程度訳稿に手を加えたのかを推測し得る、一つの実例を提供してくれるものであろう[9]。

９　おわりに

森鷗外の初期翻訳作品を検討してみると、その自在さが目に付く。本論文で検討したように、底本に存在しない文言の創作的付加がある一方、省略や要約的翻訳も見られる。このような翻訳態度が、鷗外の諸々の翻訳のいつごろまで続くのか、ということは、筆者の今後の検討課題である。また、初期鷗外の翻訳流儀が、ひとり鷗外だけの流儀なのか、それとも明治翻訳界に通底する潮流の一つであったのか、ということも大きな問題である。

「戦僧」に限って言えば、本論文で示したように、鷗外の翻訳原稿に元々ルビが振られていたのかどうか、という問題が見えて来た。また初出と再掲、再々掲を比較することによって、途中から誤記（誤植）が生じ、結果的に鷗外が誤訳をなしたように見えるケースもあった。鷗外の訳文を検討する際、今日容易に手に入る全集版のみを見ていたのでは見落とす諸問題が存在することが、「戦僧」の分析によって明らかになった。

鷗外の翻訳を、明治獨逸学史、あるいは明治洋学史の中に位置づけて検討することによって、鷗外の翻訳流儀のさらなる解明がなされるものと思われ、それが今後の研究課題となろう。

---

[8] 会話文を『　』でくくるのは、原文のままである。

[9] 前掲『鷗外全集』第1巻「後記」(p.646)には、初出『少年園』版において「屑」に「ものゝくづ」とのルビが振られている旨が記されている。しかし、その当否については判断が示されていない。